

初対面 3 人会話における共話的会話展開 —あいづちを手がかりにして—

大 塚 容 子

Kyowa in First-encounter Conversations among Three Persons —A Perspective from Back-channeling—

Yoko OTSUKA

Abstract

The purpose of this study is to examine how three Japanese males use back-channels in four kinds of first-encounter conversations, to investigate the placement where back-channels are used and to analyze how co-operative conversational development (*kyowa*) is conducted.

Various linguistic strategies are employed in order to let the listeners use back-channels, and back-channels are used at the end of the fragments of the utterances in Japanese.

Key words

back-channel, placement, co-operative conversational development

はじめに

言語によって文法が異なるのと同じように、会話の展開方法も言語によって異なる。水谷(1983)は日本語のあいづちに注目して、日本語の会話展開を欧米型の「対話」に対して「共話」と呼んだ。対話では会話参加者 A が発話すると、会話参加者 B はその発話に対して新しい情報を提供したりして会話が進んでいく。一方、共話では会話参加者 A の発話に対して会話参加者 B が頻繁にあいづちを打ったり、相手の発話内容を繰り返したりして会話が進んでいく。水谷(1988: 8-9)は共話の例として(1)のような会話展開を紹介している。

(1) 共話

—あの、先生……

—ハイ。

—お忙しいところ、まことに恐れ入りますが……

—イヤイヤ

—実はこの作文のことなんです……

—ウン

—ちょっと見ていただけないでしょうか。

自分が書いた作文の添削を依頼するのに「お忙しいところまことに恐れ入りますが、作文を書いたのでもっと見ていただけないでしょうか。」というように、一気に述べるのではなく、相

手の反応を見ながら、区切って依頼するのである。区切りの場所がまさにあいづちが打たれる場所である。日本語母語話者は聞き手があいづちを打つことができるように、会話を展開しており、これが共話的な会話展開である。

本稿では、このような共話的な会話展開がどのような構造のもとに行われるのかを明らかにする。すなわち、あいづちがどのような言語表現の後に打たれるのかを調査・分析する。まず、初めにあいづちについて述べ、次に調査方法について説明する。次に、あいづちがどのような言語表現の後に用いられているかを調査し、どのように共話的な会話展開が行われているかを分析する。

1. あいづち

堀口（1997：42）に倣い、あいづちを「話し手が発話権を行使している間に、聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える表現」と定義する。そして、「ああ」、「うん」等の非語彙的あいづち、「はい」、「そうですか」等の語彙的あいづち、繰り返しを調査対象とする。繰り返しとは、話し手の発話の一部、あるいは発話全体を繰り返すものであり、話し手から送られた情報を共有するという点で、あいづちと同様の機能をもつものだと考えられる。

（2）のような、話し手の発話が終わっていないときに、聞き手が話し手の発話の続きを推測して発話する先取り発話は共話の特徴の一つであるが、あいづちのように相手の話を聞いている信号というよりも、より積極的に会話の構築に関わっていくものなので、先取り発話は調査の対象としない。また、笑いやうなずき等の非言語行動も本稿では扱わない。

（2）〔データ12〕

648 J14 それで、大阪ほど交通量もあるわけでは
→ 649 J15 ないですね。

2. 調査

2.1. 調査資料⁽¹⁾

本稿で用いるデータは、約30分の日本語母語話者男性3人による4種類の初対面会話である。会話はビデオに録画すると同時にICレコーダーに録音した。データとして用いる会話番号、各会話の参加者は表1のとおりである。

表1 会話参加者

データ	会話参加者
12	J13、J14、J15
13	J16、J17、J18
14	J19、J20、J21
17	J24、J25、J26

会話参加者はすべて大学院の男子学生である。データ12、13、14のテーマは奈良についてである。⁽²⁾奈良についてどんなことでも構わないので、自由に話すように指示した。データ17のテーマ

はもし同じゼミになったら、どのような内容でゼミを行うか、である。本稿の基礎資料となるのは、これらの会話を文字化したものである。⁽³⁾

2.2. 調査手順

非語彙的あいづち、語彙的あいづち、繰り返しをあいづちターン、それ以外のターンを通常ターンと呼ぶことにする。一度に複数のあいづちが使われている場合があるが、全体で一つのターンとみなす。

あいづちターン直前のターンの終末表現によってターンを分類する。(3)の123、127のような、そこで文が完結しているターンを終結ターン、125のように発話が127につながっているようなターンを継続ターンと呼ぶことにする。

(3) [データ12]

123 J14 大阪でもあんまり、最近はちょっともう、ザリガニなんかはあんまり見ないです。

124 J15 そうだね。

125 J14 昔はもう、もうそこら中に穴掘っていたように思うんですけど、

126 J15 ええ。

127 J14 最近はもうだいぶ数が減ったと思うんですよ。

128 J15 ええ、うん。

あいづちターンが出現する直前の終結ターン、継続ターンのターン末表現が如何なるものであるかを調査する。

3. 結果

3.1. あいづちターンの使用率

4種類のデータにおけるあいづちターン数、通常ターン数、ターン総数、ターン総数に占めるあいづちターン数の割合を会話参加者別に示したのが表2である。

表2 会話参加者のあいづちターン、通常ターンの使用数

データ	会話参加者	あいづちターン	通常ターン	総数	あいづちターン／総数
12	J13	29	166	195	14.9%
	J14	31	185	216	14.4%
	J15	204	96	300	68.0%
13	J16	0	91	91	0%
	J17	17	172	189	9.0%
	J18	28	166	194	14.4%
14	J19	16	164	180	8.9%
	J20	46	129	175	26.3%
	J21	21	242	263	8.0%
17	J24	60	279	339	17.7%
	J25	67	205	272	24.6%
	J26	30	116	146	20.5%

データ12ではJ15のターン総数に占めるあいづちターン数の割合が極端に高い。データ13ではJ16は全くあいづちを打っていない。データ14ではJ20が他の二人の参加者に比べて多くのあいづちを打っている。データ17のJ26はあいづちターン数も通常ターン数も他の二人の会話参加者よりも少ないが、ターン総数に占めるあいづちターン数の割合は20.5%になっている。各データのあいづちターン数の合計は、データ12が264、データ13が45、データ14が83、データ17が157である。会話参加者の会話への参加のし方、会話の展開のし方の違いによって、あいづちターン総数はデータによって異なる。共話という観点からみると、データ12はJ15が頻繁にあいづちを打ち、最も共話的な会話の展開をしたことになる。

3.2. 終結ターンと継続ターン

表3はあいづちターンが終結ターンと継続ターンのどちらのターンの後に現われているかをデータ別に示したものである。いずれのデータも終結ターンの後よりも継続ターンの後にあいづちターンが多く現われていることがわかる。

表3 終結ターンと継続ターン

データ	終結ターン	継続ターン	合計
12	70	194	264
13	21	24	45
14	37	46	83
17	63	94	157

3.3. 終結ターンの終末表現

終結ターンの終末表現が如何なるものであるか、表4に示す。φは終助詞等が伴わない言い切りの形であることを表わす。

表4 終結ターンの終末表現

データ	12	13	14	17	合計
表現					
φ	12	5	6	19	42
ヨ	9	1	8	7	25
ネ、ネエ	24	0	3	12	39
カ	2	0	2	9	13
ヨネ	12	1	3	2	18
カネ	4	0	1	1	6
ナア	0	1	5	0	6
ジャナイデスカ	4	0	0	2	6
その他	3	13	9	11	36
合計	70	21	37	63	191

いずれのデータも言い切りの形は少なく、(4)、(5)、(6)のように「ヨ」、「ネ」、「ヨネ」等の終助詞が使用されていることが多い。

(4) [データ17]

302 J25 それで結果は出てるんです(↑)

→ 303 J26 全部出てますよ。

304 J25 はああ。

(5) [データ17]

→ 509 J24 理科系ってそういうの、多いですね。

510 J25 えっ、へええ。

(6) [データ13]

→ 153 J17 ああ、そうなんかい、そっち派かな。(ポーズ) よくそれで図書館の日にちがよう変わってるから、ミスることあるんだよね。

154 J18 ああ。

データ13の「その他」には、「ネン」、「ヤン」、「ヤロ」等の関西方言の文末表現が含まれている。

3.4. 継続ターンの終末表現

継続ターンの終末表現には様々な表現が含まれている。あいづちの出現位置を調査した中島(2011)を参考にし、終末表現を次の6種類に分類する。

(7) 継続ターンの終末表現の分類

- ①終助詞・間投助詞、引用助詞
- ②接続助詞、並立助詞
- ③名詞修飾
- ④名詞、補足語、主題
- ⑤接続詞、フィラー、副詞
- ⑥その他

③の名詞修飾には名詞、イ形容詞、ナ形容詞による修飾、連体修飾節による修飾が含まれている。④の補足語とは、名詞、あるいは名詞節に格助詞がついたものである。

表5は各表現の出現数をデータ別に示したものである。

表5 継続ターンの終末表現

データ	12	13	14	17	合計
終末表現					
①	18	2	4	8	32
②	77	12	15	45	149
③	17	0	1	13	31
④	38	10	18	21	87
⑤	24	0	7	4	35
⑥	20	0	1	3	24
合計	194	24	46	94	358

接続助詞、並立助詞が最も多く、次に名詞、補足語、主題となっている。3番目は接続詞、フィルター、副詞で、終助詞・間投助詞、引用助詞がそれに続く。以下に、それぞれの具体例を示す。

3.4.1. 終助詞・間投助詞、引用助詞

終助詞・間投助詞で最も多いのは「ネ」である。引用助詞は「ト」「ッテ」である。

(8) [データ12]

- 551 J15 奈良はやっぱり、食べ物じゃなくて伝統工芸品なんでね。<笑い>
552 J14 そうですね。

(9) [データ12]

- 371 J14 たぶんあの、その、奈良の水のせいではなくて、たぶん設備の差のせいだと
372 J15 ああ。
373 J14 思うんですけど。

3.4.2. 接続助詞、並立助詞

接続助詞で最も多いのは「テ」で52件、全体の34.9%を占める。次に多いのは「ケド」で27件、全体の18.1%を占める。「テ」と「ケド」で接続助詞、並立助詞の後のあいつち出現数の約半数を占めることになる。そのほかに、接続助詞として「ノデ」、「カラ」、「バ」、「ト」、「テモ」、「ノニ」等が挙げられる。並立助詞には「タリ」、「トカ」等がある。

(10) [データ17]

- 107 J24 うん。なんか、やってて。それで、なんか、無音室に入れられて、実験とか言われて、骨伝導マイクでしゃべって。
108 J25 へえ。
109 J24 聞こえますかとか言われて。
110 J26 <笑い>
111 J25 ほんじゃあ、それ、スピーカーなしで、本当に骨だけで(↑)
112 J24 うん、骨だけで聞こえました。

(11) [データ14]

- 194 J21 ん、まあ、今展示やってるの、うちのゼミだから俺強制的に入らされてるけど。
195 J19 ああ。
196 J21 あれもなあ、金かかっている割にそんな人の出入り、ええことないからなあ。

(12) [データ12]

- 29 J14 そうですね。まあ、大阪に住んでても、やっぱり最短ルートってどれだろうって思ったり。
30 J15 ああ。
31 J14 その、あの、交通機関なんか使ったりすると、その、ルートとしては最短でも、その、電車がそのとき来てなかったら、結局最短じゃないんで。
32 J15 ああ、ああ。
33 J14 それもややこしいなあと思いますね。

(13) [データ12]

- 449 J13 大阪府はそういうことないですけどね、大阪市になると、あのう、阿倍野だけじゃなくて、浪速区とか、
450 J15 うん。

- 451 J13 西成区とか、
- 452 J15 うん。
- 453 J13 あの、生野区とか、
- 454 J15 うん。

3.4.3. 名詞修飾

(14) は名詞修飾の例である。209の「合成してつくって、分解できて、うれしいなと言っているような」が211の「世界」を修飾している。

(14) [データ17]

- 207 J25 自分で人工的につくったデータを
- 208 J24 はい。
- 209 J25 合成してつくって、分解できて、うれしいなと言っているような
- 210 J24 ああ。
- 211 J25 自己完結した世界です。

3.4.4. 名詞、補足語、主題

(15) は216が「鳥」という名詞で終わっており、217で繰り返しが用いられている例、(16) は「別の味が食べられるってこと」という大きな名詞節に格助詞「ガ」が付加されている例、(17) は「学部のほう」が主題化されている例である。主題の中には「ハ」だけではなく、「ッテ」も含まれている。

(15) [データ12]

- 216 J14 うん、あれですね。あの、昔はちょっとあの、鳥。
- 217 J17 あ、鳥。
- 218 J14 あの、何ていうか、もっとその、鳥、見かけるのが変わってきたような。昔、シラサギとかそんなん、
- 219 J15 ああ。
- 220 J14 あの、田んぼとか来てたんですけど、それもだいぶ減ったなど。

(16) [データ12]

- 501 J14 それでも、その、別の味が食べられるってこと自体が、
- 502 J15 ああ。
- 503 J14 その、ちょっとうれしいと思うこともありますね。

(17) [データ17]

- 530 J24 やっぱ、工学系は結構、許されないですよ、それって、て、何か、工学部の先生に聞いたんですけど。何か、プログラムに、何か入れて、ああ、何か、工学系の、特に学部のほうは
- 531 J25 うん。
- 532 J24 なんか、ある種の、なんか、ある種の規定があって、それに縛られてるって話を聞いた。

3.4.5. 接続詞、フィラー、副詞

副詞の直後の出現数が多く、71.4%を占める。(19) がフィラーの例、(20) が副詞の例である。

(18) [データ12]

- 271 J14 その幅が違うだけで、もしかしたら結構意外にいろんな声出せるんかもしれない

いですね。

- 272 J13 そうですね。ほかにも
 273 J15 ね。
 274 J13 もしかしたら可能性があるかもしれない。

(19) [データ12]

- 530 J13 ただ、あれなんでしょう。柿の葉ずしは、僕たまに、あの、
 531 J15 ええ。
 532 J13 奈良に誰かが行って

(20) [データ14]

- 363 J21 え、なんか、あこも、うん、これの噂聞くんだけど、たまに。
 364 J20 ああ、そうなんや。

4. 考察

まず、4種類のデータいずれにおいても、あいづちは終結ターンの後よりも継続ターンの後に打たれていることが多いことが明らかになった。あまりあいづちを打たなかったデータ13においても、継続ターン後のあいづちターン数が終結ターン後のあいづちターン数を若干上回っていた。Otsuka (2011 b) によれば、英語のあいづちは発話途中で打たれるよりも発話の後、主に母文の後で打たれることが多い。これは英語母語話者は「相手が話し終わるのを待ってから口を開く」(水谷 (1988: 5)) という態度と一致する。日本語では聞き手が話し手の発話の途中であいづちを打たないと、話し手は自分の話を聞いていないのではないかと心配になる。あいづちは相手の話を聞いている、あるいは理解しているという信号なので、話し手は聞き手からのあいづちを受けて、話を続けることができる。この現象を話し手の側からみると、話し手は聞き手があいづちを打つことができるような話し方をしているのである。終結ターンのターン末表現が言い切りの形ではなく、終助詞「ヨ」、「ネ」、「ヨネ」、「カネ」が付加されている場合が多い。終結ターンのうち、言い切りの形で終わっているターンの割合は22%、これらの終助詞が付加されているターンの割合は46.1%である。Maynard (1997: 87) は「ネ」、「サ」、「ノ」、「ヨ」、「ナ」等のいわゆる終助詞を *interactional particle* と呼び、メッセージや聞き手に対する話し手の判断や態度を表わすと述べている。そして Maynard (2009: 99-100) では、「ヨ」は話し手が聞き手が知らないと仮定した情報を提供するときに用いられ、「ネ」は確認と親しみを表わし、複合型の「ヨネ」は両者の効果をもつと述べている。これらの終助詞を用いることによって話し手は単に情報を提供するだけでなく、聞き手に対して何らかの働きかけをしており、その働きかけに対して聞き手はあいづちを打つと考えられる。

次に継続ターンの場合を考える。最も多いのが接続助詞、並立助詞で、あいづちターンの最も少ないデータ13においても接続助詞、並立助詞の直後に打たれたあいづちターンの数が一番多い。中でも「テ」の使用率が最も高く、データ12では (21) のように、「テ」が2回連続して使われている場合もある。

(21) [データ12]

- 489 J14 うん。あの、例えば、その、駅前で飲みに行こうとしたときも。
 490 J15 ええ。
 → 491 J14 結局どの駅前にも似たようなチェーン店ばかりあって、

492 J15 ええ。

→ 493 J14 結局同じところに行ってしまうっていうのが残念で。

494 J15 ええ。

「テ」は話しことばの場合、次から次に発話をつないでいくのに便利な手段であると言える。中島（2011：170）が指摘するように、接続助詞は「節について、節と節とを明確に区切る役割を持つ」。その区切れにポーズが生まれ、聞き手はあいづちを打つのである。

次に多いのが名詞、補足語、主題である。補足語は（16）のように、比較的長いまとまりをもつものが多い。まとまりのところでポーズが生じ、あいづちが打たれる。

接続詞、フィラー、副詞がそれに続く。最も多いのが副詞である。終助詞・間投助詞、引用助詞と名詞修飾がほぼ同数となっている。終助詞・間投助詞で最も多いのは「ネ」である。終結ターンのところでも述べたが、「ネ」には確認の機能があり、聞き手に対して何らかの働きかけをしている。また、比較的長い引用節の後にあいづちが打たれることが多い。

名詞修飾はイ形容詞、ナ形容詞による比較的短い修飾もあれば、（14）のように修飾要素が長いものもある。

このように日本語では様々な言語現象の後にあいづちが打たれることによって、会話が展開されている。話し手は一方的に話すのではなく、聞き手の反応を見ながら会話を進める。聞き手は黙って話し手の話を聞くのではなく、発言の途中、主にポーズが生まれるところであいづちを打つ。それは終助詞の直後であったり、接続助詞の直後であったりする。話し手が情報を要求すると聞き手が情報を提供するという単なる情報交換ではなく、聞き手はあいづちを打つことによって会話に参加し、話し手と聞き手が協力し合って会話を展開させているのである。

おわりに

あいづちが打たれる位置を調査することによって共話がどのような言語現象によって支えられているかを示した。発言をするときは終助詞「ヨ」、「ネ」、「ネエ」等を用いることによって聞き手への働きかけをし、長く発言するときは一気に述べるのではなく、統語的なまとまりのあるところで区切って話す。このような話し方をすることによって聞き手からのあいづちを促し、話し手と聞き手とが情報を共有したことを確認するのである。共話的会話展開の姿である。

注

- (1) 本稿でデータとして用いる会話は大学英語教育学会待遇表現研究会の資料である。データ番号、会話参加者番号は待遇表現研究会で付けられたものである。
- (2) データ12、13のあいづち行動については大塚（2011）参照。データ14、17のあいづち行動については Otsuka（2011 a）参照。
- (3) あいづちが調査の焦点になっているため、他の発話者と重なりがあっても独立した行に記す。

文字化の記号について

- 、／。 語尾の音が下がって区切りがついたことを示す。
- （↑） 語尾の音が上がっていることを示す。
- < > 非言語行動であることを示す。
- 分析の焦点であることを示す。

参考文献

- 堀口純子 (1997) 『日本語教育と会話分析』 くろしお出版
- Maynard, Senko K. (1997). *Japanese Communication Language and Thought in Context*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Maynard, Senko K. (2009). *An Introduction to Japanese Grammar and Communication Strategies [Revised Edition]*. Tokyo: The Japan Times.
- 水谷信子 (1983) 「あいづちと応答」 水谷修編『講座 日本語と表現 3 話しことばの表現』 筑摩書房、37-44頁
- 水谷信子 (1988) 「あいづち論」『日本語学』 第7巻13号、4-11頁
- 中島悦子 (2011) 『自然談話の文法—疑問表現・応答詞・あいづち・フィラー・無助詞—』 おうふう
- 大塚容子 (2011) 「初対面の3人会話におけるあいづち—ラポール構築の観点から—」『岐阜聖徳学園大学紀要』 第50集、85-95頁
- Otsuka, Yoko. (2011 a). *Aizuchi* in the Conversation among Three Persons—Perspective from Rapport Building—. Poster presented at the 12th International Pragmatics Conference in Manchester, UK.
- Otsuka, Yoko. (2011 b). A Case of Reactive Tokens. Paper presented at the Conversational Management of Inner Circle Englishes and the Implications for EFL Education (II: Content) Symposium at the JACET 50th Commemorative International Convention in Fukuoka, Japan.